

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

新 知 人 故 郷

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2024.7 Vol.44

令和6年7月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
〒430-8533 浜松市中央区中央二丁目1番1号
TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125
https://www.suac.ac.jp/library/

Contents

■表紙

濱松郷土讀本 ————— ①

■図書館散歩

コンテンツからの、
コミュニケーション ————— ②

国際文化学科 准教授
内尾 太一

本もまた、
久しくとどまることなし ————— ③

デザイン学科 准教授
丹羽 哲矢

■知っていますか?こんなサービス

学生購入希望(リクエスト) ————— ④

■図書館ニュース

シリーズ展示
「サイエンスとデザイン」 ————— ⑤



濱松郷土讀本 (表紙)



上空より見たる濱松市の中央 (挿図)

濱松郷土讀本 濱松市教育會[編]
谷島屋書店、1932年

貴重書庫 [092.1/H 24]

本誌ではこれまでに『静岡縣誌(静岡縣師範學校蔵版)』(Vol.36)、『遠江風土歌』(Vol.38)を掲載し、かつて使われていた郷土の教科書をご紹介します。今回は、当地・浜松で昭和初期に用いられていた小学校の読みものをご覧ください。

大正から昭和に時代が移る頃、当時の社会経済情勢のもと、郷土を見直し郷土に根を下ろす運動が高まり、全国の師範學校に郷土研究室が設置されます。濱松師範學校第二附属小学校(濱松追分尋常小学校)にも郷土室が設けられ、それと同時に「郷土讀本」の必要性が説かれるようになりました。

これを受けて、濱松市教育會(現在の浜松市教育委員會)は、浜松に関する児童の理解を深めるため、昭和7年(1932年)2月に『濱松郷土讀本』を刊行しました。この讀本の編纂には、委員長として濱松追分小学校長兼濱松師範學校訓導の二橋三郎が当たったほか、濱松元城小学校訓導の武田賢一や、濱松縣居小学校訓導の渥美實など、市内の教員12名が携わりました。

はしがきの冒頭に記載されているように、『濱松郷土讀本』は市内小学校上級生の課外讀物として編纂され、週一度の課外授業として設けられた「郷土科」の授業で利用されました。本書では浜松の歴史や産業、ゆかりの人物などが取り上げられています。例えば「濱松市の沿革」では、冒頭で「濱松の遠い昔は、今尋ねることが出来ない。然し此の邊を古くから曳馬ひくまといつて居たことは明かである。平安朝の頃からは、此の地方一帯を「波萬萬津」と總稱したらしい。」と記されています。

また、当地の伝説も扱われています。「黒地藏」は、本学の近くにある八幡町の万福寺境内に安置されている「身代り黒衣地藏」にまつわる伝説です。

参考文献:

浜松市役所編 『浜松市史[通史編]3 近代編』(浜松市、1980)
浜松史跡調査顕彰会編 『遠州産業文化史』(浜松史跡調査顕彰会、1977)
神谷昌志著 『浜松歴史散歩: 浜松とその周辺の史跡ガイド』(静岡新聞社、1985)

本書は 阿蘇裕矢 先生(静岡文化芸術大学名誉教授、元・文化政策学科長)より本学に寄贈されました。



国際文化学科 准教授

内尾 太一

Uchio Taichi

紹介した図書

アンソニー・ギデンズ著、
松尾精文ほか訳
『社会学』
361/G 42

ビエール・ブルデュー著、
原山哲訳
『資本主義のハビトゥス：
アルジェリアの矛盾』
332.06/B 67

ロバート・D・パトナム著、
柴内康文訳
『孤独なボウリング：
米国コミュニティの崩壊と再生』
361.6/P 98

G.C.スピヴァク著、
上村忠男訳
『サルタンは語る事ができるか』
304/Sp 5

ポール・ファーマー著、
豊田英子訳
『権力の病理：
誰が行使し誰が苦しむの：
医療・人権・貧困』
361.8/F 15

カズオ・イシグロ著、
土屋政雄訳
『わたしを離さないで』
933.7/I 73

高野秀行著
『幻獣ムベンベを追え』
294.474/Ta 47

ジョン・クラカワー著、
佐宗鈴夫訳
『荒野へ』
936/Kr 1

三浦綾子著
『塩狩峠』
913.6/Mi 67

酒井隆史著
『ブルシット・ジョブの謎：
クソどうでもいい仕事はなぜ増えるか』
081/Ko 19/2645

上橋菜穂子著
『精霊の守り人』
913.6/U 36

コンテンツからの、コミュニケーション

本を読むのはまあ好きだが、読書会はもっと好きだ。

本を通じて得たばかりの感動、学んだばかりの知識は、他の誰かと共有したくなるものである。しかし適当な誰かに、その本の内容を熱っぽく語れば語るほど、それを読んでない相手のほうは白けていく。その話に興味なさそうなのを察すると、途端に気まずい思いになる。私にはそういう経験が結構ある。

読書会はその点の心配がいらぬ。一般的に読書会は、予め指定された本を読んで集まり、お互いの感想を共有する交流イベントのことを指す。思い返してみれば、私はこれまで、院生時代のトレーニングとして、市民活動の一環として、そして大学教員になってからはゼミ生とともに、合計すると五十冊以上の本を誰かと一緒に読んできた。ここでは、コンテンツとコミュニケーションをめぐるちょっとしたライフストーリーを書かせて欲しい。伝えたいことは、本は何を読むかと同じくらい、誰と読むかということも大事だということだ。

大学院に進学したての頃、周りの議論についていくため、知的に背伸びをすることに懸命になっていた。しかし、大著、名著、古典の類を独りで読んでも本当に自分が理解できているかどうか怪しいものであった。だから、高い山はみんなで越える。その発想で、他の院生仲間数人と声を掛け合い、夕方以降に集まって読書会をするようになった。ギデンズやブルデュー、パトナムなんかを読んだが、中でもスピヴァクは難解で目眩がした。自分が作成した配布レジュメを見返すと、その当時の苦戦ぶりが伺える。若さゆえの学術的な雰囲気は多少あったかもしれないが、それも含めて研究者として歩む上であの経験は欠かせなかったと思っている。

私は博士課程在籍中にNPO運営もかなり本気でやっていた（その辺りの経緯は拙著『復興と尊厳』に詳しい）、その活動の一部として読書会を定期開催していた。院生だけではなく一般市民の参加者も増え、10人以上での開催もざらであった。選ぶ本も理論的なものだけでなく社会問題を扱うものや、小説も含まれるようになった。その時に読んだポール・ファーマーの『権力の病理』は、自分がどんな人類学者になりたいのかを深く考える契機となった。カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』を読む回は、その分野の一線で活躍するようになった同い年の日吉信貴さん（著書に『カズオ・イシグロ入門』がある）と今まで続く親交のきっかけとなった。読書会は、私の生き方や交友関係にも善きものをもたらしてくれた。

大学教員になってからは、やはりというか、ゼミの活動として読書会を始めた。本のチョイスもまた変わり、自分が大学生の頃にこの本に出会っていたら（高野秀行『幻獣ムベンベを追え』、ジョン・クラカワー『荒野へ』）、自分が学部時代に読んだ本を今みんなと一緒に読んだら（三浦綾子『塩狩峠』）、といった観念も加わった。また、ゼミ生に対しては、せっかく同じ本が手元にあるのだから具体的なページに言及しよう、できるだけ他の人の発言も拾って議論を深めていこう、そういった指導も併せてするようになった。

前任校にいた頃にはコロナ禍もあったが、その間はオンライン読書会を、江戸川大学の川瀬由高さんのゼミと合同で継続した。全国的に巣ごもり需要で本が売れたが、同時に私たちはコミュニケーションも欲していた。オンライン読書会はまさにそれを叶える場だったと言える。

本は心のご飯、とはよく言ったものだが、読書会はさしずめ心の宴会であろう。飲み会ならぬ読み会。好きな本をそれぞれ持ち寄ってプレゼンし合うビブリオバトルもいいが、同じ本を読むことで個々人が感じるものの差異の方が、その人の個性をよりはっきり際立たせる気がする。だから、本の内容から少しはみ出た自分語りも、読書会中の絶妙なスパイスである。グレーバーの『ブルシット・ジョブ：クソどうでもいい仕事の理論』を解説した新書の回、参加していたある大学の職員さんが、「偉い人の側に控えて、Zoomのミュートを解除する仕事ですかね」、と言った時は失礼ながら腹を抱えて笑った。

そして、静岡文化芸術大学に来て2年目。今年から文化人類学を掲げる専門ゼミもスタートした。その1期生たちと一緒に、日本を代表するファンタジー作家で文化人類学者の上橋菜穂子の『精霊の守り人』をつい最近読んだばかりだ。ゼミ生に上橋作品のファンがいて、文化人類学のゼミのエントリーとしていい一冊だと私も思った。ゼミ読書会は当日までにその本を読み終えてくる、というのが唯一のルールだが、この機会に初めて上橋作品を読むという別のゼミ生は、読了した勢い余ってシリーズ二作目の『闇の守り人』を読み始めたという。こういう話を聞くと堪らなく嬉しくなる。

さあ次はどんな本をみんなと読もう。SUAC図書館関係者の皆様、何か面白い読書会企画、一緒にいかがでしょうか。



デザイン学科 准教授

丹羽 哲矢

Niwa Tetsuya

紹介した図書

鴨長明著、
浅見和彦校訂・訳
『方丈記』
081/C 441/KO10-9

長尾重武著
『小さな家の思想：
方丈記を建築で読み解く』
527/N 17

谷口尚規著、
石川球太画
『冒険手帳：
火のおこし方から、
イカダの組み方まで』
786/Ta 87

手塚治虫著
『火の鳥』
(鳳凰編)(乱世編)(羽衣編)
726.1/Te 95

窪田僚著
『ヘッドフォン・ララバイ』
913.6/Ku 14

マイケル・ポラニー著、
高橋勇夫訳
『暗黙知の次元』
081/C 441/HO10-1

マイケル・ポラニー著、
長尾史郎訳
『個人的知識：
脱批判哲学をめざして』
116.5/P 76

福岡伸一著
『生物と無生物のあいだ』
081/Ko 19/1891

福岡伸一著
『生命はなぜそこに宿るのか』
(動的平衡) [11]
460.4/F 82/1

本もまた、久しくとどまることなし

「ゆく河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつむすびて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖と、またかくのごとし。」鴨長明による『方丈記』の冒頭部分である。小中学校の授業で暗記して覚えている方も多いかもしれない。初めて知った時は世の中というものは移り変わってゆくものなんだろうな、と思う程度の感想だったのだけど、ここ10年ほどはつくづく色々なものは不変ではないと思うようになった。本という媒体はかなり不変的なのではないかと思っていたのだけど、もちろんそんなことはない。当方が専門とする建築も同じで、そもそも『方丈記』は鴨長明が度重なる災害を経て、家を失い、生家に戻ることが叶わず、都を囲む山の中で隠遁して暮らす方丈から描かれたものだ。建築研究者である長尾重武による著書『小さな家の思想：方丈記を建築で読み解く』は『方丈記』の描かれた時代の歴史的側面と鴨長明の人物像とその住まい(方丈)を紐解く著書であり、『方丈記』本編だけではわからない背景が読み込めて興味深い。

本は初動で売れないとすぐに絶版になる場合もあるが、売っていた本も気づくと絶版になってしまっていることもある。運よく版を変えて生き残ることもあるが、オリジナルで読み慣れた本は版が変わると何か違和感を感じてしまう。『冒険手帳』は今から50年以上前に書かれた本で、小学生だった僕のサバイバルライフのバイブルとして何度も繰り返し読んだし、その後も海外を含む旅先にもいつも携えていったものだ。著者は谷口尚規、画は漫画家の石川球太で、豊富なイラストが妙にリアルで少年から青年にかけての「冒険」心を鼓舞してくれたし、程よいサイズのB6判で読みやすかったのもよかった。一説には200刷近く重版された大ベストセラーだけど、実用書ということもあり今は絶版。21世紀ブックスという書籍シリーズがそもそも今はない。出版元を変えて今から20年ほど前に運よく文庫版が出版され現在にまで残されているのは嬉しいけれど、イラストが小さくなってしまい老眼の自分にはやや辛い。

版の大きさということで言えば、手塚治虫の代表作『火の鳥』はB5サイズ朝日ソノラマ版で育ったので、今もこのサイズで読みたい。特に『鳳凰編』はその絵の緻密さに圧倒されるが手元にあるものは子どもたちも読み継いだためにかなり傷んでおり、同じ版が朝日新聞出版から今でも出されているので買おうかどうか悩ましい。手塚治虫は版を変えるときに手を加えるので同じ題名の本でも読後感がかなり変わってしまうこともある。例えば『望郷編』は角川書店版ではバツリ途中が削除されているし、『乱世編』も物語の構成が若干異なる。マニア的にはそれぞれの版の違いを楽しむのもアリだとは思うが全ての版を読み尽くすのはなかなか時間が取れない今日この頃である。

絶版となっても出版社や版を変えて残されればいいのだけど、そのまま入手できなくなる本もたくさんある。例えば僕の同世代には人気のあった作家：窪田僚の小説作品は全て絶版になっているけど、読みたい人は多くいるようで、中古市場では定価の5~10倍程度の価格で取引されるほど。改めて今、読んでも主人公の心の動きの描写は新鮮だ。『ヘッドフォン・ララバイ』の冒頭文「で、桑田佳祐のしゃがれ声が、ウォークマンのヘッドフォンを通して、おれの鼓膜を快く愛撫していた。」は秀逸で、読者は一瞬にして主人公と一体になってしまう。桑田佳祐は未だに現役で活躍しているけど、小説の中のツールはすっかり様変わりしてしまっているから、今のティーンエイジャーには時代小説のように感じられてしまうかもしれない。

若い頃は翻訳本を読むことが苦手に感じていて、特に専門書の類はこなれていない日本語表現や、原著が書かれた言語特有の言い回しが受け付けなかったことが理由かもしれない。『温故知新』の記事で取り上げたこともある『暗黙知の次元』は、本学図書館には1980年発行の佐藤敬三訳の紀伊國屋書店版が所蔵されていたけれど、2003年発行の高橋勇夫訳のちくま学芸文庫版を新たに加えてもらった。双方の訳とも労作ではあるものが高橋勇夫訳では「commitment」を「かかり合い」と日本語訳しており、より原著の理解をしやすくしている。原著者のPolányi Mihály(日本語読みではポラニー・ミハイ、英語名Michael Polanyi)は1891年ハンガリー出身のユダヤ人で、ブダペスト大学で医学の学位を取得した後1914年よりドイツに留学し化学を専攻して博士号を得たが、ナチ党が政権をとった1933年にイギリスに移り物理化学者として多くの論文を書いている。1948年に社会学者として転身して”Personal Knowledge”(1958)(日本語題『個人的知識』)を記したのち、上記の原著”The Tacit Dimension”を1966年に上梓している。このような彼の研究対象の変遷や時代背景が、人間の存在意識や思考過程の深い洞察に繋がっているように感じている。

分子生物学者として研究を続けていた福岡伸一は、「生物とは何か」という根源的な問いをあらためて考えるようになった。先にあげたPolányi Mihályほどの転身ではないにしても研究を重ねるうちに、自身の根源的な問いに向き合ったのだと思う。『生物と無生物のあいだ』や『動的平衡』はそんな彼の研究履歴とそこからの問いが感じられて示唆に富んでいる。前書は講談社現代新書シリーズから出ており、出版から17年が経った。大ベストセラーとはいえ、今後の出版事情からすると絶版になってもおかしくはない。一方『動的平衡』は2009年発行の単行本は既に絶版となってしまったようで、出版社と新書版に版を変え、『生命はなぜそこに宿るのか』となった。『動的平衡』は雑誌連載記事が元となっているものの、生物というものは分子レベルでは絶えず交換をし続ける動的平衡な存在であるという視点で、さまざまな生物に関する根源的な問いや研究成果をわかりやすく解説してくれている。ただし、日進月歩の生物学の世界を描いたその内容は、時間の経過による陳腐化で平衡は崩れ、30年後には書籍として存在していないのかもしれない。

知っていますか?こんなサービス

学生購入希望 (リクエスト)

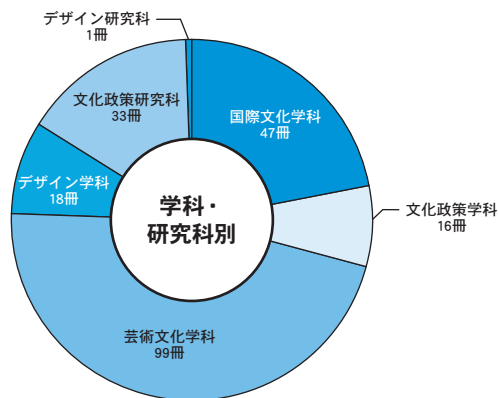
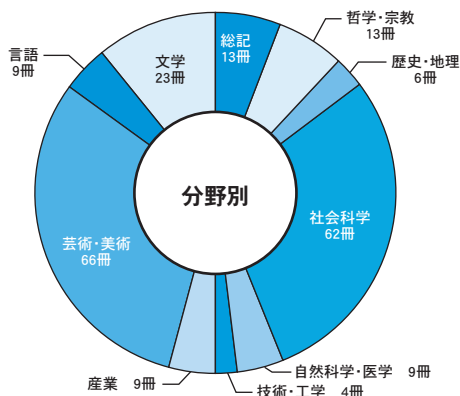
図書館・情報センターを利用して、「読みたい本があるけど所蔵されていない」「こんな本を置いてほしい」「卒業制作に必要な本があるけど、個人では高価で買えない」などといったことはありませんか?

そのような時は、学生購入希望(リクエスト)を活用してください。学生購入希望を申込するときは、カウンター前の掲示板にある「購入希望図書申込書(3枚綴)」に必要事項(図書の情報など)を記入して、カウンターに提出してください。

★学生購入希望 (リクエスト) について

- ・学生購入希望は、本学の学生を対象とするサービスです。
 - ・2023年度は6～7ページ掲載の214冊を受け入れました。
 - ・絶版や品切となっている図書、洋書、CDやDVDなどの視聴覚資料も申込可能ですが、入手できないこともあります。
 - ・雑誌・漫画類および1点が5万円以上の高額図書を除きます。
 - ・学習や調査研究に無関係の個人的な利用目的は対象外です。
 - ・一度に多数の購入希望を申し込むのはご遠慮ください。
- その他、学生購入希望で不明なことがありましたら、カウンターでご相談ください。

■2023年度の実績



学生購入希望 (リクエスト) で購入した図書のご紹介

『現代美術キュレーター 10のギモン』

難波祐子著
青弓社, 2023.12
[702.07/ N 47]



現代美術とは何でしょうか。

みなさんも「なぜこれが美術館に展示されているのか」「なぜこれが作品なのか」といった疑問を抱いたことがあるかもしれません。本書は、これらの疑問に対して明確な答えを示しているわけではありません。しかし、筆者の考えや本書で取り上げられる理論や事例は、多様化する現代美術に対して自分なりの考え方を持つ際の参考になると思います。

本書では、現代美術のキュレーションをめぐる10の「ギモン」を設定し、キュレーターである筆者が具体的な展覧会や作品の事例をもとに、キュレーションの基本的な視点やキュレーターの意義を指し示しています。キュレーションのガイドブックとして、本書は現代美術、特に従来の絵画や彫刻といった作品だけでなく、人の身体や時間を素材とする作品や、鑑賞者の参加を重要な構成要素とする作品、さらに音楽や映像の展示・収集・保存についても焦点を当てて考察されています。キュレーションや博物館の仕組みを知る中で、美術作品に対する新たな考え方のヒントを得られる内容となっています。

キュレーションや現代美術についての本を初めて手に取る人にも、これまで授業等で得た知識や経験を振り返る際に参考になるような本を探している人にも、本書をおすすめしたいです。

近年では、鑑賞者が作り手となり、アーティストとの協働によって生まれる作品や、絵画や彫刻ではなく、コミュニケーションやシステムとしての作品が増えています。これらをどのように捉えることができるのでしょうか。また、国際展では、同じようなキュレーターが選定するスター・アーティストの企画が並ぶ現状は何を示しているのでしょうか。作家の意向により記録がとれないパフォーマンス・アートを、美術館はどのように収集・保存するのでしょうか。過去の展覧会を再現する展覧会とは何なのでしょう。疑問は尽きませんが、これらのギモンが現代美術について改めて考えるきっかけを与えてくれるのではないのでしょうか。このような論点に魅力を感じた方は、ぜひ本書を手にとってみてください。

【文化政策学部 芸術文化学科 4年 酒巻 鼓】

『私の家では何も起こらない』

恩田陸著
KADOKAWA (角川文庫), 2016.11
[913.6/0 65]



あなたの家が幽霊屋敷だと言う男が押しかけてきたら、あなたはどうしますか？多くの人は私の家では何も起こらないと否定して、追い返そうとするのではないのでしょうか。なぜそんなことを聞くのか、この家を幽霊屋敷にしたい男に同じような質問を何度もされ、うんざりするでしょう。丘の上の古い洋館に住む女主人も、家を訪ねてきた幽霊屋敷マニアの男に繰り返し質問され、せつかくの穏やかな午後が台無しになってしまいました。

男はこの館に住んでいたかつての住人たちの痕跡を辿り始めます。仲の良い姉妹が殺しあった台所、さらった子供を主人に食べさせた料理女が死体を隠した床下の収納庫、スケッチに描かれた小さな人影が覗く2階の窓。本書には、これまでの住人たちの記憶を辿るような短編の物語が収録されています。

物語の中では、独白が多く用いられていて、中には独白のみで構成されているお話もあります。登場人物の率直な気持ちが表れる反面、長い独白はずっと一人で喋っているような不気味な印象を与えます。中でも特に印象に残った一節を紹介します。「丘の上の幽霊屋敷と呼ばれていることも知っているけれど、そんなものは誰もが子供の頃に聞く、トピックの一つに過ぎない。夏休みの日記の、最後のほうのページに登場するあれだ。夏の終わりの風物詩。」男のしつこい質問に嫌気が差した女主人が、自分の住む洋館に思いを馳せているのですが、肝試しの言葉を使わず表現されていて、その秀逸さに思わず唸りました。

私はホラーが苦手です。小学生の頃に、「ほんとにあった怖い話」を見てトラウマになりしばらく一人でトイレに行けなくなりました。今もたまに思い出しては、ひとり暮らしの暗い廊下で何か出るのではないかと考えてしまいます。しかし、この本は違います。怖いけれどページをめくってしまう、恐怖と好奇心が入り交じる肝試しのような体験でした。いかにも何かが起こりそうなしっとりホラー短編集。暑い日の作業のお供にぜひいかがでしょうか。

【デザイン学部 デザイン学科 4年 山崎 あやら】

『越境の映画史』

堀潤之、菅原慶乃編著
関西大学出版部, 2014.3
[778.2/H 87]



私たちは常に越境しています。

「越境」とは、境界線を越えることです。隣地から隣国に至るまで、私たちの周りには様々な境界線が存在しています。未曾有のパンデミックによって、境界線がより可視化され、越境という言葉を実感させてくれています。また、グローバル化とボーダレス化が急速に進んでいる今の世界、戦争や災害によって移動を強いられる人々や、観光や留学、仕事で自ら移動する人々など、多くの人々が越境しています。「越境」という概念は近年、人文科学の諸領域に大きな影響を与えていますが、残念ながら、映画史・映画研究を扱った文献には国別の枠組みを記述的前提として取り入れる場合がほとんどです。

映画は国や地域の越境、時代の越境、製作者の越境など、様々な越境をもたらしていますが、一国史観的な映画史の言説はそうした越境的要素の存在を認めながらも、それらを従属的・周縁的なものとして扱うことがほとんどです。その結果として、国別に映画史を整理するということが常態であり、様々な意味の越境を例外であると通念が強化されることになります。

本書は二部構成で、東洋・西洋の映画史における「越境」に関する6つの事例を提示しています。第一部「映画は越境する」の3つの事例は、映画作品の伝播（越境）とそれが及ぼす影響に焦点を当てています。第二部「越境する映画人たち」の3つの事例は、映画人の実際の越境的な活動に注目しています。時代的には初期映画から1960年代半ばまで及び、地理的にはヨーロッパ、アジア、そして北米に関わっています。

「映画に国境はない」とよく聞きますが、映画には「越境」という概念がつきものです。本書の特徴は、映画史における特定の越境的な事象に焦点を絞るのではなく、比較的広い範囲に及ぶ時代と地域をカバーすることによって、越境的な出来事が映画史にどれほど偏在しているかを提示することです。また、それぞれの事例を通して、地理的・人的越境といった現象を凌駕する多様性をも包含しうることが確認できます。

本書を手にとり、その目の前にある境界線を越えてみませんか？

【大学院 文化政策研究科 2年 戴 周杰】

受入図書一覧

請求記号	資料名	請求記号	資料名
007.1/B 13	メタバース進化論：仮想現実の荒野に芽吹く「解放」と「創造」の新世界	361.4/N 96	無意識のバイアスを克服する：個人・組織・社会を変えるアプローチ
007.13/Ko 12	生成AI：「ChatGPT」を支える技術はどのようにビジネスを変え、人間の創造性を揺るがすのか？	361.453/Ka 83	小山田圭吾の「いじめ」はいかにつくられたか
007.13/Ku 79	シンギュラリティは近い：人類が生命を超越するとき エッセンス版	361.453/Sh 88/11	ポスト情報メディア論（「シリーズ」メディアの未来:11）
007.13/N 73	ChatGPTエフェクト：破壊と創造のすべて	361.5/H 53	Cultures of authenticity
007.13/Sh 49	教養としての生成AI	361.5/L 63	Culture and authenticity
007.5/Sa 85	コミュニティ・アーカイブをつくろう！	361.5/To 46	文化資源学：文化の見つけかたと育てかた
007.6/A 24	初心者からちゃんとしたプロになるFigma基礎入門：読む＆作りながら学ぶ！	361.7/KI 6	集まる場所が必要だ：孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学
007.6/Mo 89	現場のプロがわかりやすく教えるUI/UXデザイナー養成講座	361.81/Ka 99	華族令嬢たちの大正・昭和
007.64/I 72	アルゴリズム図鑑：絵で見てわかる33のアルゴリズム 増補改訂版	361.81/O 81	華族家の女性たち
015.2/N 71	やってみよう図書館での医療・健康情報サービス 第3版	361.81/Se 58	明治・大正・昭和華族事件録
016.2/N 23	公共図書館を育てる	361/Ku 61	アクターネットワーク理論入門：「モノ」であふれる世界の記述法
016.54/N 71	病院図書室デスクマニュアル：スキルアップのために【改訂版】	366.21/W 46	10年後に食べる仕事食えない仕事：AI、ロボット化で変わる職のカタチ
022.57/P 15	ブックデザイン365	366.38/H 23	家政婦の歴史
102.8/To 49	超訳哲学者図鑑	366.38/Ka 15	主婦と女中
121.59/Y 86	留魂録：新訳：吉田松陰の「死生観」	367.21/Sh 49	「女中」イメージの家庭文化史
130.4/G 88	ケアの哲学	367.253/J 96	怒れる女たち
135.5/N 48	否認された共同体（叢書・エクリチュールの冒険）	367.68/Ta 59	世界と私のA to Z
140.7/P 24	ラディカル質的心理学：アクションリサーチ入門	367.7/Ka 53	日本のアクティブエイジング：「少子化する高齢社会」の新しい生き方
141.51/Ku 11	「推し」の科学：プロジェクション・サイエンスとは何か	367.9/C 38	ACE：アセクシュアルから見たセックスと社会のこと
159.4/Ku 93	絶対悲観主義	367.9/Mi 93	BL研究者によるジェンダー批評入門
159/C 52	「静かな人」の戦略書：騒がしすぎるこの世界で内向型が静かな力を発揮する法	371.1/F 46	被抑圧者の教育学 50周年記念版
159/C 76	バビロン大富豪の教え：「お金」と「幸せ」を生み出す五つの黄金法則	372.3892/Ki 63	フィンランド×日本の教育はどこへ向かうのか：明日の教育への道しるべ
162.2/So 63/2	地域社会をつくる宗教	373.7/Ky 2/2025-13	愛知県の論作文・面接過去問 2025年度版（愛知県の教員採用試験過去問シリーズ）
162/A 79	血の焔：宗教と暴力	375.83/H 38	中等学校国語科教材史研究
162/Su 48	霊と女たち	376.48/Ko 15	高知道手前高校百年史【本体】
182.1/B 87/7	寺と地域社会（仏教民俗学大系：7）	382.133/To 49	餅なし正月の世界：地域民俗論序説
204/G 75	万物の黎明：人類史を根本からくつがえす	382.1361/N 87	江戸庶民の四季（読みなおす日本史）
210.25/Mo 12	土偶を読むを読む 第2版	383.1/A 92	ファッションスタディーズ：私と社会と衣服の関係
217.7/H 13/50	吉田松陰留魂録（萩ものがたり:vol.50）	383.1/Ta 29	越境するファッション・スタディーズ
234/Ki 39/1	ドイツ史 上（Yamakawa selection）	383.837/H 51	イタリア料理の誕生
234/Ki 39/2	ドイツ史 下（Yamakawa selection）	384.31/I 89	サネモリ起源考：日中比較民俗誌
235/N 39	フランスの歴史を知るための50章	384.7/My	秘宝館という文化装置
302.1/R 66	90年代サブカルの呪い	386.1/H 38	舞台の上の文化：まつり・民俗芸能・博物館
302.2/A 27/69	中国映画のみかた（あじあブックス:069）	386.1361/O 93	大江戸年中行事の作法
311.1/R 62	政治的身体とその〈残りもの〉（叢書・ウニベルシタス:1151）	386.81/H 44	歌舞伎の原郷：地芝居と都市の芝居小屋
311.234/O 93	戦争と政治の間：ハンナ・アーレントの国際関係思想	387/D 93	図説魔女の文化史
316.1/F 56	「自由」の危機：息苦しさの正体	388.1/F 74	昔話の伝播
316.8/Ky 1	多文化主義のゆくえ：国際化をめぐる苦闘	388.12/Mi 56	常陸坊海尊の再誕
316.8/P 64	差別と資本主義：レイニズム・キャンセルカルチャー・ジェンダー不平等	389/I 54	生きていること：動く、知る、記述する
317.6/Ku 14	日本型政策評価としての事務事業評価	391.2/D 99	戦争と人類
318/I 38	AI自治体：公務員の仕事と行政サービスはこう変わる！	401/Ku 11	ブルーノ・ラトゥールの取説：アクターネットワーク論から存在様態探求へ
319/D 76	国家ブランディング：その概念・論点・実践	490.1/Mo 22	多としての身体：医療実践における存在論（人類学の転回叢書）
329.94/Ki 58	入管を問う：現代日本における移民の収容と抵抗	493.74/H 53	心的外傷と回復 増補新版
330/F 57	社会的連帯経済：地域で社会のつながりをつくり直す	493.74/I 85	なぜふつうに食べられないのか：拒食と過食の文化人類学
331.8/Sc 9	人間の喜びと経済的価値：経済学と心理学の接点を求めて	493.74/My	心因性非てんかん性発作へのアプローチ
334.422/W 12	「異郷」としての大連・上海・台北	493.763/Ko 55	統合失調症の一族：遺伝か、環境か
334.4614/Sa 65	黄金郷（エル・ドラド）を求めて：日本人コロンビア移住史	498.07/F 74	ヘルスリテラシー：健康教育の新しいキーワード
335.21/Y 19	大学発ベンチャーの組織化と出口戦略	498.07/N 45	これからのヘルスリテラシー：健康を決める力
336.1/H 84	SDGs時代のソーシャル・イントラプレナーという働き方	498.25/Y 99	優生保護法が犯した罪：子どもをもつことを奪われた人々の証言 増補新装版
336.91/Ta 73/3	スキリわかる日商簿記3級 第14版	520.4/I 85	造物主義論：デミウルゴモルフィスム
338.18/Ma 29	Just keep buying：自動的に富が増え続ける「お金」と「時間」の法則	557.84/Ka 54	近世海難救助制度の研究
361.1/H 27	疲労社会	588.54/I 19	ぶしゅよなよなエールがお世話になります
361.4/G 72	ストーリーが世界を滅ぼす：物語があなたの脳を操作する	588.57/Su 87	新世代蒸留所からの挑戦状：ジャパニーズ・ウイスキーで世界に挑む
361.4/L 58	社会的葛藤の解決：グループ・ダイナミクス論文集	601.1/Ko 45	人が集まる場所をつくる：サードプレイスと街の再生

請求記号	資料名	請求記号	資料名
601.126/Ko 61	新地方論：都市と地方の間で考える	775.1/I 44	現代演劇 (国文学解釈と鑑賞別冊)
627/H 56	花ことば：起原と歴史を探る：新装版	778.04/Ka 57	クィア・シネマ：世界と時間に別の仕方存在するために
645.6/A 57	全国の犬像をめぐる：忠犬物語45話	778.04/Mi 66	スクリーン・スタディーズ：デジタル時代の映像/メディア経験
666.9/Me 14/20	改良メダカ大図鑑：100年メダカ Vol.20(2023)	778.04/Ts 32	異文化社会の理解と表象研究
673.99/Ta 73/2023	みんなが欲しかった!宅建士の教科書 2023年度版	778.09/D 27	ミニシアター巡礼
673.99/Ta 73/2023	みんなが欲しかった!宅建士の問題集：本試験論点別 2023年度版	778.2/C 39	無声映画入門：調査、研究、キュレーターシップ
673.99/Ta 73/2023	わかって合格宅建士分野別過去問題集 2023年度版	778.2/H 55	映画広告案土権垣紀六洋画デザインの軌跡：題字・ポスター・チラシ・新聞広告集成
675/I 46	エモ消費：世代を超えたヒットの新ルール	778.2/H 87	越境の映画史
701.1/C 22	批評について：芸術批評の哲学	778.21/I 94	戦時下の映画：日本・東アジア・ドイツ
701.1/H 27	Saving beauty English ed : pb	778.21/U 32	新派映画の系譜学：クロスメディアとしての「新派」
701.3/B 31	Art worlds 25th anniversary ed., updated and expanded	778.21/U 32	日本映画草創期の興行と観客：東京と京都を中心に
701.3/C 93	芸術文化の価値とは何か：個人や社会にもたらす変化とその評価	778.21/Y 81	日中映画論
701.3/H 98	Museum and gallery publishing : from theory to case study	778.22/Y 81	男たちの絆、アジア映画：ホモソーシャルな欲望
701.3/Sh 83	芸術と労働	778.2224/Ko 11	侯孝賢の映画講義
701.3/Z 5	The economics of contemporary art : markets, strategies, and stardom	778.235/C 16	作家主義レオス・カラックス：アートシアター時代1988×2022
702.07/N 47	現代美術キュレーター10のギモン	778.235/C 16	レオス・カラックス：映画を彷徨うひと
702.07/P 22	美術のトラちゃん	778.8/Su 96	ヒーローたちの戦いは報われたか：昭和特撮文化概論
702.098/Ma 61	世界で一番美しいマンガ大図鑑	779.13/Sa 67	三遊亭楽天のTRPG(テーブルトーク・ロールプレイング・ゲーム)落語
702.16/Su 21	ネオ・ダダの逆説：反芸術と芸術	783.7/Ki 55	稼ぐ!プロ野球：新時代のファンビジネス
702.37/F 38/1	Lucio Fontana : catalogo ragionato delle opere su carta t. 1	798.4/Se 88/1	セッションデイズ vol.01
702.37/F 38/2	Lucio Fontana : catalogo ragionato delle opere su carta t. 2	801.03/F 12	言語とパワー
702.37/F 38/3	Lucio Fontana : catalogo ragionato delle opere su carta t. 3	801.03/N 37	ジェンダーで学ぶ言語学
702.8/O 63	コンテンポラリー・ファインアート：同時代としての美術	807/Sa 47	外国にルーツをもつ子どものバイリンガル読書力
704/N 62	芸術とマルチチュード	810.7/Ma 51	「活動型」日本語クラスの実践：教える・教わる関係からの解放
706.919/C 12	蔡國強宇宙遊：「原初火球」から始まる	810.7/N 71/2	ことばと文化を結ぶ日本語教育(日本語教師のための知識本シリーズ)
706.98/A 23/2022	Still alive (国際芸術祭あいち:2022. Aichi Triennale)	810.7/N 71/4	実践研究は何をめざすか：日本語教育における実践研究の意味と可能性
709.1/F 94	文化財学の基礎：文化財とは何か 改訂版	810.7/N 81	新次元の日本語教育の理論と企画と実践：第二言語教育学と表現活動中心のアプローチ
709.1/N 37	アートプロジェクト文化資本論：3331から東京ビエンナーレへ	815/Sa 45	現代日本語法の研究 5版
712.37/F 38/1	Lucio Fontana : catalogo ragionato delle sculture ceramiche t. 1	830.79/Ko 85/8	公式TOEIC listening & reading問題集 8
712.37/F 38/2	Lucio Fontana : catalogo ragionato delle sculture ceramiche t. 2	910.268/I 57	「井上ひさし」を読む：人生を肯定するまなざし
719/G 63	Félix González-Torres Roni Horn	910.268/I 57	井上ひさし：総特集：やわらかく、ときに劇的に(文藝:別冊)
719/G 63	Felix Gonzalez-Torres	910.268/Ko 12	「文学」としての小林多喜二(国文学解釈と鑑賞別冊)
719/G 63/1	Felix Gonzalez-Torres 1	911.14/W 46	新古今時代の表現方法 プリント・オン・デマンド版
719/G 63/2	Felix Gonzalez-Torres 2	911.152/Su 22	なぜ和歌(うた)を詠むのか：菅江真澄の旅と地誌
723.1/N 51	奈良美智 終わらないものがたり	912.6/I 57	井上ひさしの演劇
726.101/N 64	ヘイト・悪趣味・サブカルチャー：根本敬論	913.6/H 59	彼女は頭が悪いから
727.8/I 43	レタースペーシング：タイポグラフィにおける文字間調整の考え方	913.6/Ka 62	安寿子の靴
727.8/Ma 61	タイポグラフィ・ブギー・バック：ぼくらの書体クニニク	913.6/Ki 54	燕は戻ってこない
727/B 11	TRPGのデザイン	913.6/O 65	私の家では何も起こらない
757.02389/W 45	「北欧デザイン」の考え方	913.6/Ts 44	噛みあわない会話と、ある過去について
757.3/Sa 47	日本の美しい色と言葉：心に響く和のデザインがくれる本	913.6/U 58	変な絵
760.4/O 77	演奏家が語る音楽の哲学	913.6/Y 99	レゾンデートルの祈り
762.1/Ki 22	日本音楽の歴史	913.6/Y 99	レゾンデートルの誓い
762.3/H 49	古楽の終焉：HIP(歴史的知識にもとづく演奏)とはなにか	914.6/Mi 77/1	夏雲の記憶(宮本研エッセイ・コレクション:1(1957-67))
762.33/Y 46	シェイクスピア音楽論序説	914.6/Mi 77/2	〈革命〉-四つの光芒(宮本研エッセイ・コレクション:2(1968-73))
764.6/Sa 14	楽器から見る吹奏楽の世界：カラー図解	914.6/Mi 77/3	中国と滔天と私(宮本研エッセイ・コレクション:3(1974-81))
764.7/Ka 75	ロックの正体：歌と殺戮のサビエンス全史	914.6/Mi 77/4	時を曳く(宮本研エッセイ・コレクション:4(1982-88))
764.7/Sp 5	スピッツ論：「分裂」するポップ・ミュージック	930.278/L 94	All overクトゥルー：クトゥルー神話作品大全
767.8/Sa 99	新しい音楽：漣健児とカヴァー・ポップス	931/P 76	ボオ詩と詩論
770.67/O 38	大野剣友会伝：特撮ヒーロードラマを支えた達人たち 増補新版	933.7/Mi 28	Positioning Pooh : Edward Bear after one hundred years
770/B 71	Tino Sehgal : art as immaterial commodity	933/B 38	試行錯誤 9版
771/B 76	The empty space (Penguin classics. Theatre/Drama)	950.278/B 27	はじまりのバタイユ：贈与・共同体・アナキズム
772.1/O 38	三月の5日間		(計 214 冊)
774/Mi 53	芝居日記		

シリーズ展示「サイエンスとデザイン」

本学の学生に「科学」（サイエンス）への興味や関心を深めてもらう試みとして、的場ひろし先生（本学デザイン学部教授、元・図書館・情報センター長）の企画・構成により、館内の展示スペースに於いて「サイエンスとデザインに関する展示」をシリーズで開催しています。

この展示では、複雑で難しいと思われがちな内容について、図やイラストを豊富に交えて解説した展示幕によって、分かりやすく伝えています。また、展示幕のそばには関連図書が配置され、理解をより深められるようになっています。

【第1回】 「我々をとりまく電磁波」 （2019年3月）

電磁波に関する様々なトピックスを、電磁波の波長と人類の歴史の2つの軸で整理して解説。本学の学生や近隣の高校生が参加したミニレクチャーとワークショップも実施。

[企画協力]

三村 秀典（静岡大学 電子工学研究所 所長）
針山 孝彦（浜松医科大学 光先端医学教育研究センター 特任教授）

[制作協力]

望月 麻衣（本学デザイン研究科 1年）
柴田 頼人（本学デザイン学科 3年）



【第2回】 「私たちの視覚」 （2020年3月）

私たちの「視覚」を成立させている複雑な仕組みについて、「眼における処理」「眼から脳への伝達」「脳における処理」の流れを一望する形で解説。

[企画協力]

針山 孝彦（浜松医科大学 光先端医学教育研究センター 特任教授）
小松 英彦（玉川大学 脳科学研究所 所長）

[制作協力]

望月 麻衣（本学デザイン研究科 2年）
柴田 頼人（本学デザイン学科 4年）



【第3回】 「様々な明かり」 （2021年3月）

人類が創り出した様々な明かりを一望する試みとして、基本的な明かりの方式と、3つの時代区分による明かりに関するトピックスを整理して解説。

[企画協力]

三村 秀典（静岡大学 電子工学研究所 所長）
井山 弘幸（新潟大学 人文学部 教授）
内藤 康秀（光産業創成大学院大学 准教授）
横田 浩章（光産業創成大学院大学 准教授）

[制作協力]

望月 麻衣（本学デザイン研究科 修了）
柴田 頼人（本学デザイン学科 卒業）
吉田 紫穂（本学デザイン学科 4年）



【第4回】 「太陽系の色」 （2024年3月）

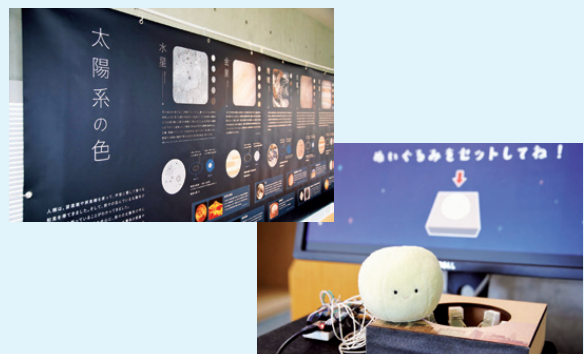
太陽系の惑星と衛星について、近年わかってきたそれぞれの持つ色に着目し、最新の知見を紹介。本学学生による「月の満ち欠け」に関するインタラクティブな作品も展示。

[企画協力]

佐竹 渉（千葉工業大学 地球学研究センター 研究員）
小熊 みどり（科学コミュニケーター、サイエンスライター）

[制作協力]

望月 麻衣（本学デザイン研究科 修了）
河内 若葉（本学デザイン学科 3年）
角谷 日菜子（本学デザイン学科 3年）



※協力者の敬称は省略させていただきました。
※協力者の肩書は、開催当時のものです。